
巻 頭 言

カルチャーコレクションの守備範囲を考える

筑波大学名誉教授 椿 啓介

日本微生物資源学会は早いもので現在では雑誌も 19 巻をむかえている。昭和 26 年に文部省の肝入りで前身の日本微生物株保存連盟 (JFCC) が創設されて以来、私は直接に保存連盟にはタッチしてこなかったが長尾研究所に奉職していた関係上、カルチャーコレクションには裏方のお手伝いをしたものであった。その関係からか国内あるいは国外の菌類研究機関あるいは同業者を訪問した例も少なからずあったが、四方山話も終わって引き上げる際にかならず同じ質問をするのが常となってしまった。

その質問とは我々の間ではどうってことのないことなのだが“菌株保存室と一緒にハーバリウムもありますか？”という質問である。もちろん担当者が親しく、仕事の内容がわかっている場合には省略する。というのは私は仕事柄、専門は菌類である。いわゆるカビの仲間である。カビといっても内容は広い。あちこちで研究が進められているアオカビ、コウジカビなどは勿論であるが、私が当時、最も興味をもった仲間は、世間からほとんど眼もくれてもらえなかった不完全菌類および関連菌であった。私が菌類に興味をもった頃、日本ではまだ菌類分類学に関心を示す者はほとんどなく、いたとしても上述のアオカビ、コウジカビあるいはキノコまでであった。それらが菌類の代表とされていたのだろう。ところが実際には、それぞれのコレクションには様々な植物寄生菌が相当あったのである。したがって当時、コレクションで菌類を結構持っている所はキュレーターが応用系の出身ではなく、どちらかというところという農学系の植物病理学専攻者である場合が多かった。

このように各コレクションのキュレーターの専攻がもともと何であったか、そのキュレーターにどんなコレクションの内容が要求されているか、に自ずからそのコレクションの生き方が示される。植物病理専攻者は多かれ少なかれコレクションに付随するハーバリウムを抱えるし、農化専攻者はそんな部屋のかわりに生化学に強い設備を増やす。日本において応用微生物学が欧米の学者たちによって導入され、農芸化学という日本独特の分野に支えられて発達してきた微生物化学が、医学・農学の病理学分野からの要請によって発達してきた欧米の場合といささか出発に差があることは、いみじくも長谷川武治による日本の微生物株保存培養の揺籃時代の著作に書かれている。

ちょうど昭和 25 年前後の頃だったと思うが、文部省の百瀬事務官が大きな荷物を抱えて長尾研究所にちよくちよくと来所されて小南先生と細かな相談を重ねていた。いま考えると JFCC の下準備に入っていたのであろう。JFCC 発足のときの理事会をみても文部省大学学術局長等の名が入っている。こうしてでき上がったカルチャーコレクションの集まりであるが必然的に大学など文部省が中心となったもので同省の肝煎りの産物であった。どういうわけか農水省関係からの参加はきわめて少なかった。おそらく創設のときの目的、組織その後の体制など、日本独特の周辺状況が関係していたのであろう。このようにして日本のコレクション事業の萌芽は文部省の肝入りで出発した。この結果からか日本のコレクションは培養株の保存を目的とする体制の組み立てにと進み、発展してきた。コレクションによく付随されてあるハーバリウムは文部省指導の日本では考慮されていない。キュレーターも植物寄生菌に

は関心が薄い傾向が強い。だからカビの新分類群を保存する場合でもタイプを保管すべきハーバリウムには関心がほとんどない。したがって私は特に植物病理を専攻した者ではないが、タイプなどの保管に関連してハーバリウムの存在について質問すると、植物寄生菌を研究したことがあるキュレーターは待ってました、とばかり案内するが乾燥標本の価値をつかめない者はその存在の意味自体を知らない。ハーバリウムの有無に対する返事がコレクションの持つ範囲というか、守備範囲を如実に示すことになる。

日本微生物資源学会大会においては国内の微生物関係者が専門にとらわれずに顔をみせあい、微生物の培養・保存などの分野において情報交換を行うことが常であるが、その専門とても理・農・工・医などと分かれることなく集まって情報の交換を行う。小規模とはいえ植物寄生菌が保存株に入る所は菌株分類の証拠ともなっているハーバリウムの存在にも理解を示してもらいたい。また、キュレーターの教育にも眼をむけて頂きたいものである。微生物保存という地道な分野の中で、さらに地道を貫くコレクションの最も大切な担い手なのだから。

今後、従来の分類群に入れられない特異な菌株も保存株として益々増加し、キュレーターの専門の区別も今までより確実に変化し、まさに理科系の縮図ともいえそうな専門分野の入り混じった状況になる。この変化を着実に把握して運営するのがコレクションの仕事になるのに違いない。

Title : Culture collection and its resources

Keisuke Tubaki